琉球大学学術リポジトリ

ダウン症児に対するオノマトペを利用した補助言語の開発

メタデータ	言語: 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-04 キーワード (Ja): ダウン症, 言語治療, コミュニケ-ション, オノマトペ, 言語発達 キーワード (En): Down's syndrome, speech therapy, communication, onomatopoeia, language development 作成者: 神園, 幸郎, 戝部, 盛久, Kamizono, Sachiro, Takarabe, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9047

＜研究４＞

健常児の１歳から２歳における オノマトペの発達

嘉数朝子　財部盛久　神園幸郎

背景と目的

一歳前後に，マンマ，ブーブなどの有意味語がはじめて現れる。これを初語というが、成熟に伴って現れる喃語とは異なり，養育者が適切に働きかけることによって，初語は初めて習得される。初語が出現してからも、しばらくは急激な語彙の増加はみられない。主にワンワンやブーブなどの擬態語，擬声語－オノマトペ（物音や動物の声などに対する模写的な音声）が，いくつか習得されるだけである。ピアジェの子供の最初の言語的シェムも，チュチュという擬声語から始まった（波多野，１９６５）。しかし、この間に幼児は，事物には名前があり，音声が事物に置き変わることのできる記号であることを認識するようになる。これは象徴機能の一部であるが、言語の学習の最も基礎になるものである。感覚運動期の最終段階にいる幼児にとって象徴機能を発達させることは簡単なことではない。これを助けるために周囲の大人は話はじめの幼い子どもに向かって用いる語の中に，成人どうしの会話で用いる語とは異なった形式のものを使用している。村田（１９６７）は、これを育児語とよんでいる。育児語は、幼児自身の発する音声の諸特徴を備えている。村田は，その特徴として次の４つをあげている。

①幼児の音声にみられる音韻転化その他の音声の歪みがある（例オサラ－オチャヤ）。

②音声パターンが単純で短い。

③オノマトペや反復形式が多い。

④音声的強勢ないし極端な音調を伴い，リズム的である。

初期の言語獲得における主な目的は，個々の語形成ではなく，記号（能記）とカテゴリー（所記）の間の把握をさせることである。この場合，用いられる記号が子どもにとって興味と親和性があり，自分で発音出来るものであるほうがよい。幼児は、自分自身の個人的で具体的な経験のある事象以外は関心の対象としにくい。その意味で，所記の属性の一部が類似しているような音声、つまりオノマトペは，この目的によくかなっている。

こうしていったん音声の記号化が起こると，語彙量は飛躍的に増加する。岡本（１９６２）は、１女児の追跡観察に基づいて，一歳期の語彙の急激な増加は音声模倣と意味理解の能力の増大に負うところが大であると述べている。加知（１９８９）も、１男児の観察により，音声模倣や意味理解の著しい伸びの後に語彙が増大したことを確認している。日本だけでなく，諸外国においても１歳台の初期言語のなかにオノマトペが多数含まれていることは，よく知られている。この理由として村田（１９６８）は次のように言っている。一歳段階の語彙はまだ貧弱であるが，興味は増大し伝達欲求は急増する。そのため彼らは身振りや表情などを利用して意図を伝達しようとする。オノマトペも，これらと機能はにており、需給のアンバランスを緩和する一助となっている。

本研究は，幼児の言語習得の過程を、オノマトペを中心に検討していきたい。オノマトペの使用によって言語への導入は容易になるであろう。初期の言語習得にとってオノマトペは重要な位置を占めているだろうと推測される。しかし、加齢とともにその位置の相対的重要性は変化すると思われる。前述の加知の観察記録によると１歳半までに観察された語彙数は約７０語であるが，その中でオノマトペは１１語であった。村田（１９６０）は、１歳児の育児語のなかでオノマトペの占める割合は４０．５％であったと報告している。１歳後期ともなると，語彙量が増加し成人語が優勢となるので，育児語は減少し，オノマトペの占める割合も低下していくと予測される。

本研究では、オノマトペの発達的変化を検討することを目的とする。村田（１９６０）は，一歳児ではオノマトペの頻度は高いが，後半になると低くなるようであるとのべている。そこで，１－２歳の期間を４期に区分して段階ごと

の変化を検討する。その際、言語習得は養育者と子どもの相互作用のなかで獲得されるものであるから、母親と子どもの両方の言語（育児語、幼児語）を従属変数とする。

方　法

1.被験者　1，2歳児とその母親２０組で，詳細は表１のとおりであった。
2.調査期間　１９８９年の１０月４日から１０月２２日までの期間であった。
3.調査場所　各被験者の自宅に，調査者が訪問し，調査を行った。
4.調査項目　村田（１９６０）の作成した育児語，幼児語調査（３７８項目）のなかで，研究結果から育児語に含まれる比率の高かった項目（８０項目）に新たに４項目を付け加え，合計８４項目（衣類，履物，食物，飲物，乗り物，昆虫、切れ物、火，人の動作、その他のカテゴリーであった。付録１参照）。

表１　被験児とその母親の内訳

期間	月齢範囲	人数
１期	１：０１－１：０４歳児	５名
２期	１：０５－１：０８歳児	５名
３期	１：０９－２：００歳児	５名
４期	２：０１－２：０４歳児	５名

結　果

Ⅰ.一般言語の発達

①母親の使用している成人語、育児語、欠語の変化

各期の母親の使用している育児語、成人語、欠語数を図１に示した。育児語と欠語は加齢とともに減少しているが、成人語は増加している。月齢段階を要因とする一元配置分散分析を各従属変数について行ったところ、成人語（$F(3/16)=5.66, P<.01$）と育児語（$F(3/16)=4.71, P<.05$）の主効果が有意であったので，多重比較を行った。その結果、育児語、成人語ともに４期と１，２期との間に有意な差が認められた。つまり、育児語は減少し、成人語は増加してい

くことが分かった（育児語，1-4:t(16)＝3.41,p＜.05,2-4:t(16)＝3.07,p＜.05；成人語，1-4:t(16)＝3.86,p＜.01,2-4:t(16)＝3.17,p＜.05）。

②子どもの使用している幼児語、成人語，欠語の変化

各期の子どもの使用している幼児語、成人語，欠語数を図2に示した。この図から分かるように幼児語は、1歳台では、月齢が進むにつれ増加しているが、2歳をすぎると減少している。一方，成人語では，月齢がすすむにつれ増加し、特に2歳での増加が著しい。欠語は月齢が進むにつれ減少している。月齢段階を要因とする一元配置分散分析を各従属変数について行ったところ、いずれの変数でも有意な主効果が得られたので（幼児語：F(3／16)＝3.97,P＜.05,成人語：F(3／16)＝7.09,P＜.01;欠語：F(3／16)＝3.86,P＜.05），多重比較を行った。幼児語では1－3期間（t(16)＝3.39,p＜.05）に，成人語では1－4期間（t(16)＝4.34,p＜.01)と2－4期間（t(16)＝3.47,p＜.05）に，欠語では1－4期間（t(16)＝3.18,p＜.05）に有意な差が認められた。

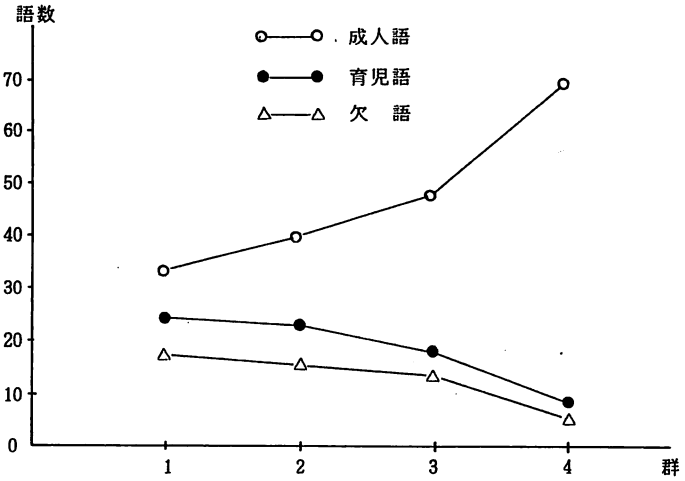

図1　各期における育児語、成人語及び欠語数の平均値

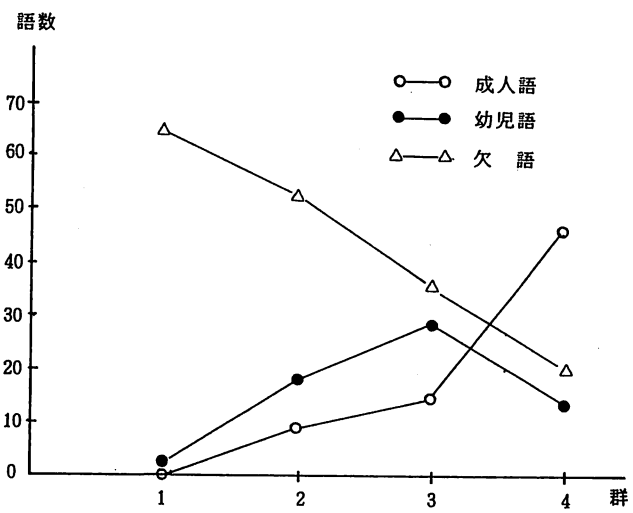

図2　各期における幼児語、成人語及び欠語数の平均値

Ⅱ.オノマトペの発達

①オノマトペの出現率

図3に母親のオノマトペの出現率を示した。2期での出現率が最も高く、その後減少している。発達段階を要因とする一元配置分散分析の結果，有意な主効果が得られた（$F(3/16)=4.10, P<.05$）。多重比較の結果，2期と4期の間の差が有意（$t(16)=3.18, p<.05$）となった。

図4に子どものオノマトペの出現率を示した。母親の場合と同じように，1期から2期へと上昇し、その後減少傾向を示している。一元配置分散分析の結果，有意な主効果が得られた（$F(3/16)=3.46, P<.05$）。多重比較の結果，1期と2期の上昇傾向は有意（$t(16)=2.95, p<.5$）となったが、3期以降の減少傾向は有意とはならなかった。

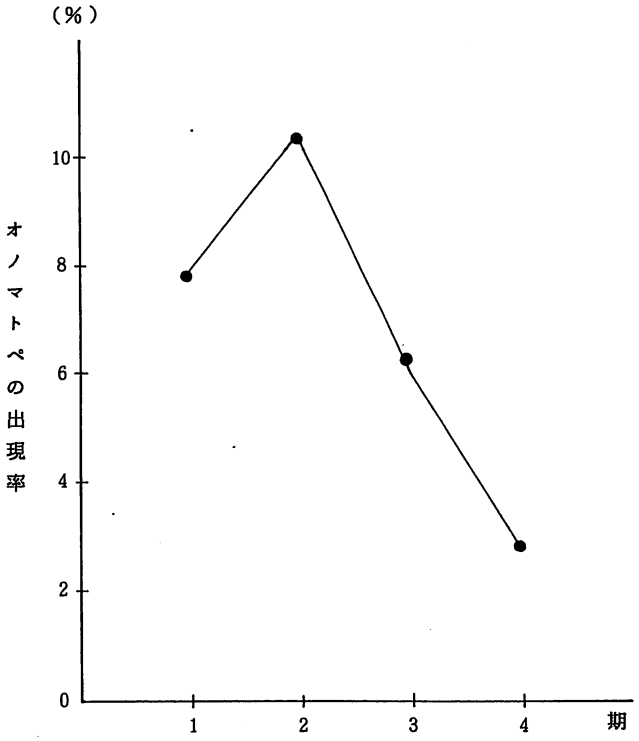

図3　各期の母親のオノマトペの出現率

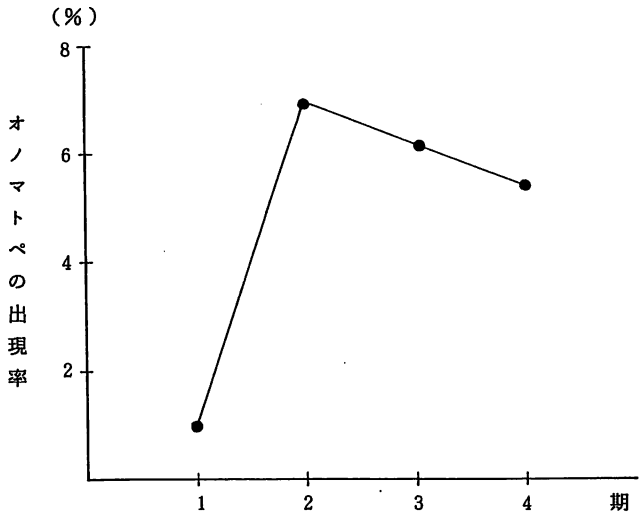

図4　各期の子どものオノマトペの出現率

②オノマトペの種類

育児語と幼児語のなかのオノマトペを,表2のように6種類に分類した。これは質的な分析になるので、年齢段階ごとの平均値を算出することはせず、被験者ごとにオノマトペの内容分類を行った。図5に,母親の育児語の中のオノマトペの機能分類を示した。オノマトペの総数は1,2期が多く,3,4期では、減少傾向が認められる。バリエーションの数は、個人差も大きいが、1,2期では、4種類の親が多いが、3,4期では少なくなる傾向にあった。分類内容としては、動作による音と動物の音声（いずれも擬音語）が最も多かった。最も少ない分類内容は,動作や状況の説明（擬態語：例；グジュグジュー書いたもの）で1例のみであった。

表2　オノマトペの種類

A	動作や状況を説明するもの
B	自己の動作や他者の動作によって生じる音
C	物によって生じる音
D	人の音声
E	動物の音声

子供のオノマトペの内容分類を図6に示した。オノマトペの総数は,1期では最も少ないが、その後は個人差が大きいが、2,3,4期ともに同程度の数であった。バリエーションの数も,発達がすすむにつれ増えるが、4期では個人差も大であるが減少傾向がみられる。分類内容としては、動物の声が1期では殆どであるが、それ以降の段階では動作による音も多い。状況の説明は2例のみ（バーバー；火）であった。以上をまとめると,1歳台前半のオノマトペは,育児語,幼児語ともに擬音語が殆どで、2歳近くになって擬態語が出てくるようである。オノマトペの総数は、2期が頂点でその後減少するが,母親の減少傾向のみが有意であった。

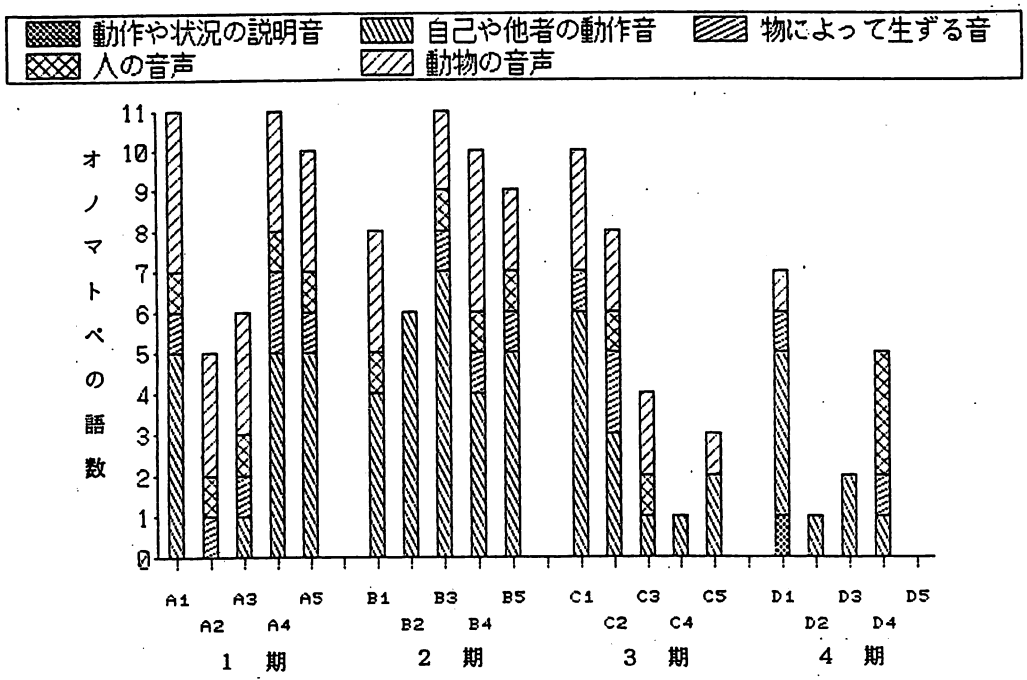

図5　各被験児の母親ごとのオノマトペの内容分類

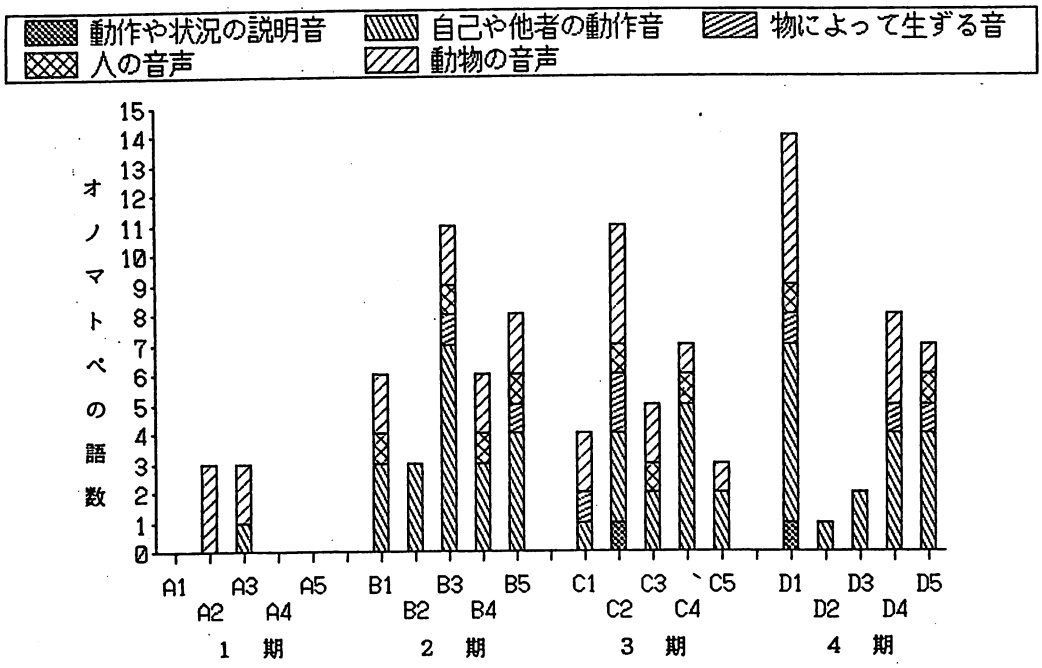

図6　各被験児のオノマトペの内容分類

考　察

本研究では1－2歳にかけての言語発達の中で、育児語と幼児語にオノマトペの占める相対的位置の変化を検討した。一般的言語発達の結果をまとめると次のようであった。母親の育児語は,加齢とともに減少し,成人語は増加したが,特に4期の増加傾向がいちじるしかった。子どもの幼児語は3期までは増加したが、4期から減少した。子どもの成人語は4期に急激に増加した。これらから、2歳になると母子ともに成人語が優勢になることがわかった。オノマトペの総数は,母子ともに2期－1歳なかばが最も多く、その後は減少するが,母親の減少傾向のみが有意であった。オノマトペの内容分析の結果から、擬声語が多く、擬態語は2歳前後に現れることが分かった。しかし,個人差が大きいことと,被験者数が少ないことから,本研究の結果の過度の一般化はひかえるべきであろう。

予測でのべたように、1歳前半においては,育児語が優勢であるので,オノマトペの数も多い。後半になると成人語が優勢となるのでオノマトペの占める割合も低くなってくる。オノマトペが言語習得の導入として有効である時期は、語彙の急激な増加の前であることが岡本（１９６２）や加知（１９８９）の結果からも明かである。語彙が増加し,成人語が優勢になってからは言語の導入としてオノマトペの役立つ機会は少ないであろう。母親の育児語の分析結果、オノマトペの減少傾向は1歳後半から急激で,意図的にしろ無意図的にしろ子どもの発達段階に対応して働きかけをかえていることが分かる。育児語の使用を有意義なものと考えるかどうかなど,母親の言語習得に対する態度を調査することによって,母親の働きかけと子どもの言語発達との関連がより明確になるだろう。

わずか1年たらずで育児語は成人語にとってかわられるのであれば、はじめから成人語を習得させるほうが能率的だと考える母親もいるようだ（本研究でも2人の母親がそう表明していた）。育児語を一時利用することは遠回りのようであるが、母子関係の自然で、合理的な手順なのである。なぜなら「座るとスワルの関係よりもトンスルの関係のほうが幼児にとっては容易に把握できよう。－－－感覚運動的知能においては、運動のイメージと音のイメー

ジは容易に結合される。というより以上に,両者は融合すらしている。擬態語の獲得も、かえって、容易である。モノはモノであるよりも,モノの使い方であり,ここでも,運動のイメージと音のイメージの結合は容易である。ことばの既存の能力（感覚運動的知能による信号理解）に即しつつも,そのうちにより新しい高次の能力（表象的知能による社会的信号操作）の形成をはかり得る－－－」（早川,１９８１）からである。オノマトペの利用は,健常児のみならずダウン症児への言語指導法として注目されてきている（神園,１９８８)。

また,オノマトペの機能としてこのような認知的な面だけでなく,楽しさ,快さといった面も重要であると思われる。子供にとってはじめての言葉は、くりかえしや調子のよさひびきが大切なのではないか。今井（１９９０）は、乳児がことばを獲得していく過程のなかで、乳児のコミュニケーション欲求を促すもとになる力の一つとして、特定の大人が語りかける「ことばの快さ」をあげている。

トドラーフッド（よちよち歩きの時期）とよばれる歩き始め、話し始めの１歳児は,さかんに擬態後、擬声語を発する。この時期を,今井（１９９０）は次のように述べている。「自分の行動にあわせていつも快いリズミカルなことばを生み出す。リズミカルでユーモラスな擬声語は,こどもの活動を活発にする促進剤なのかもしれない。人間は昔から喜怒哀楽を言葉のリズムやメロディーにかえて表現してきた。幼児にとっては喜怒哀楽はまず身体の動き（運動）とリズミカルな音声を伴った言葉になり（オノマトペ）,やがてそれが「うれしかった」「こわかった」といった言葉になっていくのではないか」。チュコフスキー（１９８４）も「こどもの詩に対する感覚は肉体的ともいえるほど大きい,－－－運動から音響へ,音響から言葉へ」と発達すると説明している。

このようなオノマトペの快さという側面は,幼児期初期に限定されないであろう。幼児期、児童期をとうして日本語のもつリズムの楽しさはくりかえしくりかえし経験されでろう。小学校の学習指導要領に「ことばのリズムに親しませる」「ことばのひびきに関心をもたせる」というねらいがある。宮沢賢治の作品にオノマトペが多くつかわれていることはよく知られている。オノマトペは,日本語の表現を豊かにするものとしても役だっている。

謝辞

本論文の作成にあたり貴重な御助言と観察記録を提供してくださった加知ひろ子先生（金城学院短期大学講師）と，調査の実施にあたって多大な協力を得た湧川千賀子さんに感謝いたします。

引用文献

今井和子　１９９０　ことばのこころよさ楽しさ発達，４１，１１，９３－１０１．

岡本夏木　１９６２　音声の記号化ならびに体制化過程にかんする研究（１９）　日本心理学会２６回大会　１７８．

加知ひろ子　１９８９　ことばの世界　堂野恵子他編　個性化と社会化の発達心理学　北大路書房

神園幸郎　１９８８　ダウン症児におけるオノマトペの発生機序　第２６回日本特殊教育学会発表論文集．

早川勝広　１９８１　育児語と言語獲得　言語生活　３，３５１，５０－５６．

村田孝次　１９６０　育児語の研究　心理学研究　３１，３３－３８．

村田孝次　１９６８　幼児の言語発達　培風館

波多野完治　１９６５　ピアジェの発達心理学　国土社

チュコフスキー　１９８４　ことばと心の育児学－２歳から４歳まで理論社

付　録

育児語調査

記入日：平成元年＿＿月＿＿日

琉球大学教育学部心理教室　嘉数朝子

＊児童名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　（男・女）
＊生年月日：昭和＿＿年＿＿月＿＿日　（満＿＿歳＿＿ヵ月）
＊主な保育者：昼（　　），夜（　　）
＊家族構成：人数＿＿人
＊兄弟構成：1男・女（　　歳），2男・女（　　歳），3男・女（　　歳）
　　4男・女（　　歳），5男・女（　　歳）

Ⅰ．母親のあなたはお子さんに向かって、以下のことばをどのように言いますか（以下育児語）。また、お子さんはどのような言い方をしますか（以下、幼児語）。普段使っている育児語、幼児語のそれぞれを表の空欄にご記入ください。この時、一つのことばの中で複数の育児語および幼児語を使っているのであれば、いくつ記入してもかまいません。〈例：ぶた→ブーブー，ブー〉
　ただし、お母さんがお子さんに対して特別におっしゃっていないことばやお子さんの方もまだ言えないことばである場合には、そのまま、空欄にしていてください。
　ご協力よろしくお願い致します。

	こ と ば	育　児　語　（母親）	幼　児　語　（子供）
衣類及びはきもの	1洋服		
	2ねまき		
	3シャツ		
	4スカート		
	5ズボン		
	6パンツ		
	7靴下		
	8ぼうし		
	9靴		
食物	10ご飯		
	11めん類		
	12パン		
	13とうふ		
	14卵		

		育　児　語　（母親）	幼　児　語　（子供）
動物	39うし		
	40うま		
	41きつね		
	42たぬき		
	43さる		
昆虫	44アリ		
	45ハエ		
	46トンボ		
	47チョウ		
	48セミ		
切れもの	49はさみ		
	50ナイフ		
	51針		
	52針箱		
火	53火		
	54コンロ		
	55マッチ		
	56ろうそく		
人の動作	57就寝する		
	58背負う		
	59抱く		
	60捨てる		
	61起立する		
	62歩く		